

文 化

「東風吹かば 匂いおこせよ 梅の花」。菅原道真の和歌を、インドの伝統音楽に合わせて歌う。俳句や現代詩でもいい。意外によく合う。西洋音楽に合わせるのには難しいが、日本語はインド伝統の豊かな旋律、ラリが広がる。日本語と、インドの言葉な

どとの間に共通の音韻や文型などがあるためだ。

人間国宝に尺八習う
楽器でも同じ。和楽器と西洋の楽器や音楽を組み合わせる試みは多くあるが、和楽器はインドの音楽との方がよく調和するように思う。「インド

のソフト」
（旋律・リズム）と「日本のハーブ」(楽器)は絶妙の相性で、コンピュータの世界のよう



東インドの演奏家②と共演する筆者

とき、一種の悟りを開いた。邦楽は、音階の数が少ないのに楽器や流派別に譜面の種類が多く、あいまいな部分が多い。しかしインド音楽では用語や記譜法が共通で、音楽体系が極めて論理的だ。言葉もそうだ。日本語には漢字と仮名を合わせて五万ほど字があるのに、発音の種類が少ない

間の列車に揺られながら考えた。私は米国に帰国して暮らすつもりだ。だがこの研究を、誰もやらないのであれば……



T・M・ホッフマン

邦楽器の中でもインド音楽と相性が良いのは尺八と箏だ。インドには音階の種類が数万もあり、ピアノと違って一つの音と音の間にもたくさん

を工夫すれば、こうした音を出すことができる。箏は特に面白い。左手を使った「押し手」の技巧や右手で弾くときに弓などを使うと、旋律による表現の幅は無限に広がる。私は去年から米国インド学会の芸術開発特別研究員として「箏によるインド音楽」の研究と実践を担当し、日印米三国を走り回っている。

今、群馬県下仁田町にある妻の実家のそばで暮らしているが、ドイツにルーツがある私の先祖には音楽家が多い。言葉と音楽を総合的に研究し創造的な活動をしている点で、オペラ「ホッフマン物語」の原作者で作曲家、音楽交流会主宰

和歌・和楽器にインドの音

◇日印音楽に調和、「音文化」の共同開発を進める◇

もインド人でもない、米国人の私がこのことに気づき、二十数年間、日本とインドの「音文化」にある共通原理の研究と演奏活動を続けてきた。

米国カリフォルニア州立大学を卒業し、国際基督教大学(ICU)に留学したのは一九七六年

だ。四歳からピアノ、大衆音楽に専念し、日本で尺八を人間国宝の山口五郎師に習った。そしてICUを卒業後、帰国前にユーラシア大陸を回ろうと旅行した時、インドで立ち止まった。邦楽や日本の音文化をインドの音楽と比較した

ため、同音異義語が多く、日本人でさえ難しい。一方、サンسكريット語系のヒンディー語などは音楽体系と同様、文法が明確で発音も多い。

両国の交流会を設立
一方で、日本語の単語は母音で終わるので、「ー」などの子音で終わる音節が多い英語と比べて、音がゆったりと伸びるインドの音楽に合う。

詩人などとして多彩に活躍した、E・T・A・ホッフマンとのつながりを感じることもある。

(T.M.Hoffmann＝日印音楽交流会主宰)